

いっぺんしょうにんごろく

#53 一遍上人語録

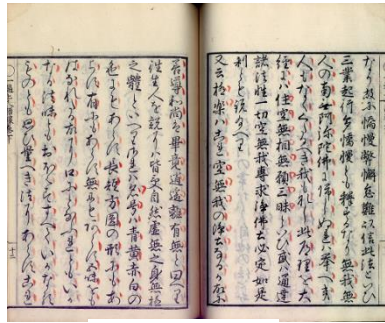
編者：俊鳳（しゅんぼう 1714-1787）

刊行：文化8年（1811）

📖 解題

■ 内容

時宗の宗祖とされる一遍（1239-1289）は、著述をいっさい残さなかった。その言葉は一遍に同行した時衆によって法語としてまとめられ、伝えられた。それらの法語集を整理し、江戸期に刊行されたのが『一遍上人語録』



[K18. 52/8/2]

である。2冊から成り、上巻には和讃・

偈文・制誡・法語・和歌など、下巻には門人が一遍から直接聞いたことばを収める。

『一遍上人語録』には宝暦13年版・明和7年版・文化8年版の3種があるが、明和7年版と文化8年版は同内容である。宝暦13年版の編集は遊行52代一海（いっかい 1687-1766）が行ったが、校正未了のうちに宝暦13年（1763）に刊行され、翌年火事で版木ごと焼けてしまう。そこでこの草稿をもとに俊鳳に校訂を依頼して出版されたものが、明和7年版（1770）である。これが文化3年に焼失してしまったため、文化8年版が刊行された。これら3回の上梓には、小林宗兵衛（円意）・勘平父子が施主として尽力した。

当館所蔵本は、下巻の後扉の記述及び跋文（あとがき）1丁があることより、文化8年版の「日輪寺学寮版本」と称されるものと判断できる。上巻42丁、下巻59丁である。

■ 作者

俊鳳は浄土宗西山派の学僧で、諱は妙瑞（みょうずい）、蔡華（さいか）老人と

号した。11歳で智恵光院に入り浄土宗西山系の教学を修めつつ、密教も学ぶ。22歳ころ長崎で漢籍を研究、参禅して禅宗を修め、39歳で念仏を修して靈感を得、以後は円戒の研究と普及に努めるなど、多彩な経歴の持ち主で著書も多く、帰依する者も多かった。

宝暦12年(1762)、江戸に来て浅草・日輪寺や藤沢・清浄光寺で講義を行った際に『一遍上人語録』の校訂を依頼される。『一遍上人語録』の唯一の注釈書である『一遍上人語録診釈』(1767)も著した。

## 本文を読む

<翻刻>

「一遍上人語録」(『大日本佛教全書』66 佛書刊行会編纂 佛書刊行会 1916)

[180.8/1/65] ※底本は文化8年版と思われる。「一遍上人語録診釈」も収録。

「一遍上人語録」(『日本思想大系 10 法然 一遍』大橋俊雄校注 岩波書店 1971) [K18.4/98] [081.6/28/10] [N1/ニホ/10]

「一遍上人語録」(『時宗全書』藝林舎 1974) [K18.52/17/1]

※底本は文化8年版と思われる。「一遍上人語録診釈」も収録。

『一遍上人語録 付 播州法語集』大橋俊雄校注 岩波書店 1985

<岩波文庫> [K18.52/45] [イ188/チ] ※文化8年版を底本にしている。

「一遍上人語録」(『原点日本仏教の思想 5 法然 一遍』大橋俊雄校訂 岩波書店 1991) [182.1/4/5] ※『日本思想体系 10』と同。

「一遍上人語録」(『大乘仏典〈中国・日本篇〉』21 佐藤了・徳永道雄訳 中央公論社 1995) [183/28-2/21] ※文化8年版を底本にしている。訳文あり。

『一遍上人語録 原文対照現代語訳』高野修編著 岩田書院 2009

[K18.52/105] ※文化8年版を底本にしている。訳文あり。

## 参考文献

平田諦善「一遍上人語録の成立考 俊鳳改訂前後の事情と学寮制度」

(『時宗教学の研究』山喜房佛書林 1977) [K18.52/60]

『一遍読み解き事典』長島尚道・高野修・砂川博・岡本貞雄・長澤昌幸編著 柏書房 2014 [K18.52/112]